

氏名（本籍）	サイ 蔡	キ 葵（中華人民共和国）
学位の種類	博士（美術）	
学位記番号	博美第128号	
学位授与年月日	平成16年3月25日	
学位論文等題目	作品 「相対的循環運動」の表現 論文 時間の形 - 動く造形における時間の表現	
論文等審査委員		
（主査）	東京芸術大学	教授（美術学部） 伊藤隆道
（論文第1副査）	”	”（”） 上野浩道
（作品第1副査）	”	”（”） 池田政治
（副査）	”	”（”） 尾登誠一
（”）	”	助教授（”） 清水泰博
（”）	筑波大学	教授（芸術学系） 穂積穀重

（論文内容の要旨）

立体造形において、百年近い歴史を持つ動く造形は若い分野であるが、この分野の芸術家達はつねに時代の動きを敏感に感じ取り、最新の技術や材料を取り入れ、新しい芸術表現を大胆に試みてきた。電気、水、光、空気、火、火薬、磁石等を動力とし、機械、コンピューター、センサーでコントロールし、材料には金属、木材、石、プラスチック、布、既製品等を用いている。また、デジタル技術の発達と普及がアートの世界にもたらした新たな発見と伴う、現在動く造形はエレクトロニク・アート、ロボット・アート、パフォーマンス・アート、インターアクション、マルチメディアなど五つの領域と密接に関連している。こうして見ると、動く造形は立体造形で最も幅広い分野と言えるだろう。しかし、これは、この分野の研究に困難をもたらしている要因でもある。

制作者としての創作と研究経験により、筆者は「動き」という時間の次元が動く造形の創作と研究において重要であることを深く感じている。本論文では筆者のこれまでの創作と研究をまとめ、現実の運動を取り込む「動く立体造形」を対象とし、「動く」という時間と密接に関連した造形的形の本質的特徴を総合的に考察することを目的としている。

第一章では、動く造形と密接に関係する時間の概念と特徴について分析を行い、直線型時間と循環型時間に相対応する「時間の瞬間」と「時間のリズム」という重要な特徴を明確にした。これらの特徴は後の文中において時間の角度から動く造形を分類する重要な根拠となっている。そのほか、時間と空間の比較を通して、「運動は空間における時間の視覚化」という重要な結論を得、動く造形を時間の角度から探求する必要性を確認した。

第二章では、20世紀初めの機械技術の発展がもたらした社会変革とそれにより誘発された芸術家の時間の表現に関する種種の思考と実験を振り返ることによって、時間的表現の角度から動く

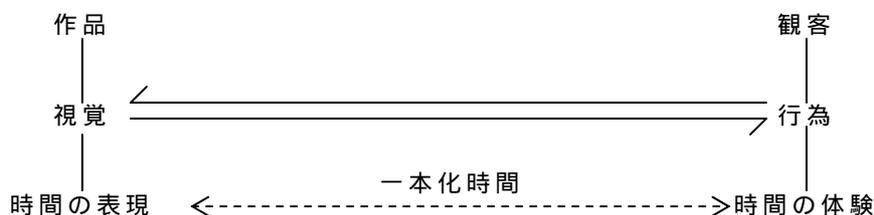
造形の発展の背景を考察した。またこれにより、21世紀のデジタル技術による時間概念の変化がもたらす動く造形の今後の発展における影響について考察した。

第三章では、動く造形の最も本質的な共通特徴である視覚化した時間としての「動き」に着目し、動く造形における「動き」の表現と「動き」の効果を考察し、「動き」を時間の瞬間性と永遠性に相応する「偶然性のある動き」と「規則正しい動き」の二種類に分け、動く造形についての新たな作品の特徴の考察を試みた。



動きと時間の対応関係による動く造形の分類

第四章では、まず「動き」という時間的要素が抽象的思想と観念を反映させる表現力となることを明らかにした。動く造形の中に有る「視覚 = 時間的表現」と「行為 = 時間的体験」面における実験性について分析し、観客参加型の動く造形が作品の時間と観客の「個別の時間から一体化した時間へ」という特徴を指摘した。最後に、デジタル技術などのニューテクノロジーの動く造形への影響を考察し、動く造形の「動くオブジェ」から「動く空間」への発展傾向を指摘した。



観客参加型動く造形における個別時間から一体化時間への模式図

第五章では、筆者が1999年から動く造形の制作と研究に従事したことを基に、筆者が、ここ数年来、制作課題とする「相対的循環運動」についての裏付けに関する論述を行った。相対的循環運動の方式で時間の表現と私の思想的発展の相互的促進関係を示した。そして、後半では動く造形の制作での重要な構造上の問題について探求を行った。

本論文では、動く造形の特徴を「動き」という時間の次元から総合的に考察を行った。そして、時間の次元から「動く空間」への可能性を引き出しつつ、「相対的循環運動」の思想による自らの制作活動の位置づけを明らかにした。